

武蔵野日曜聖書講筵 降誕節祈禱会

愛の光

——賀川豊彦伝——

——ルカ伝第2章8～21節——

1991年12月22日

小池辰雄

賀川豊彦の話 キリストの愛の光 御霊の愛 聖霊の火 生命の光 天弓

【ルカ2】

8 この地に野宿して夜、群を守りおる牧者ありしが、⁹ 主の使その傍らに立ち、主の栄光その周囲を照らしたれば、甚く懼る。¹⁰ 御使かれらに言う『懼るな、視よ、この民、一般に及ぶべき、大なる歡喜の音信を我なんじらに告ぐ、¹¹ 今日ダビデの町にて汝らの為に救主うまれ給えり、これ主キリストなり。¹² なんじら布にて包まれ、馬槽に臥しおる嬰兒を見ん、はその徴なり』¹³ 忽ちあまたの天の軍勢、御使に加わり、神を讚美して言う、¹⁴ 『いと高き所には栄光、神にあれ、地には平和、主の悦び給う人にあれ』¹⁵ 御使等さりて天に往きしとき、牧者たがい語る『いぎ、ベツレヘムにいたり、主の示し給いし起これる事を見ん』¹⁶ 乃ち急ぎ往きて、マリヤとヨセフと、馬槽に臥したる嬰兒とに尋ねあう。¹⁷ 既に見て、この子につき御使の語りしことを告げたれば、¹⁸ 聞く者はみな牧者の語りしことを怪しみたり。¹⁹ 而してマリヤは凡て此等のことを心に留めて思い回せり。²⁰ 牧者は御使の語りしごとく凡ての事を見聞せしによりて、神を崇め、かつ讚美しつつ帰れり。
²¹ 八日みちて幼児に割礼を施すべき日となりたれば、未だ胎内に宿らぬ先に御使の名づけし如く、その名をイエスと名づけたり。

●賀川豊彦の話

先程の賀川豊彦の話は、あれで三分の一なんですけれども、あの後の所にこういうことが書いてある。

その頃の賀川豊彦の日記を書こう。朝の5時から青年教育。7時から貧民窟の病人見舞い。後の午前は執筆専念。午後は病人の世話、子供との遊び、無文者や眼病人の戸籍届け等の代筆、役場行き、時には、葬式の司式一切。夕べの6時から夜学の先生。夜の8時から辻説法。9時頃帰宅。読書して祈って眠る。

こういう一日です。凄いな。御霊の力でなければ、こんな事はできない。



皆さん、聖霊の世界は、普通の計算に合わないんです。私は「エン・クリスト」49号にも書いたでしょ。

「聖霊は人生の諸々の艱難に逆比例して
力づけ給う驚くべき天の力である」

と。いいですか。絶対に行き詰まらないです、御霊の世界は。御霊の世界で行き詰まったら、御霊が本当に働いていない。私は、この詩を一气呵成に書いた。上からの力に圧倒されて、力が来てしようがない。それから、楽しくてしようがない。だから、喜びの音信おとずれなんです。

「キリストのこんな凄い福音が、そのキリストの言葉に誰が応えられるか」

と。みんな、落第生だ。ところが、キリストは水を割らないで、なぜ、こんなことをおっしゃっているか。

「私に來なさい。そうしたら、力はやるぞ」

と、それだけですよ。

「信仰」

なんていう言葉が躓きになるから、よした方がいいですよ、「信仰」「信じ仰いでいる」なんてのは。随分、乱暴なことを言うが。そんなことを言う牧師さんはいないでしょうね。

主さまだけです。

「天に在す我らの父よ」

なんていう、呑気な祈りをしてられないんだ、私は。

「主さまー」

の一言です。キリストが、

「かく祈れ」

とおっしゃったからといって、これを金科玉条にして教会ではしよつちゅうやっている。聞いていて嫌になってしまふ、眠くなってしまう。

「なぜ、お前は祈らないんだ」

と、ドイツで牧師がそう言ったよ、僕のことを。あの「主の祈り」をやるから、「なぜ、祈らないのか」と。

「いや、私は自分で祈る時に、主の祈りの一節でも出てくる時は出てきますよ」

と、はつきり答えてやった。マルチン・ルターの宗教改革をもう一遍ひっくり返して、こちが改革してやるんだ。

手島さんという人は激しい人です。内村先生も激しい。けれども、激しい人の中に、また、もの凄い深い愛がある。私はちっとも激しくない。けれども、私の中には上からの、キリストの深みがある。「深み」ではおそらく負けないつもりです。ドイツの宗教哲学者のテイリッヒが、

「20世紀は深みのない世界だ。この文明はダメだ」



と、彼の論文の中にそう書いてある。どうぞ、皆さん、
「キリストの愛の高さ、広さ、その深さはいかばかりぞや」
と書いてあるでしょ、エペソ書かどこかに。パウロはもうやりきれなくて、ああいう表現
をしているんです。もう、盛んなるかなです。

●キリストの愛の光

決して、皆さん、心配するな。

「自分はダメだ」

なんて思うな。ダメもいいもありはしない。もう、キリストだけ。集会の凄さは、その数
に逆比例する。私は数なんか問題にしません。あなた方一人一人が、

「千万人といえども我往かん」

という、本当の勇士になっても構わない。男でも女でも。

「ヒットラーは間違っている」

とはつきり言った女性がいた。ヒットラーが

「あいつを殺してしまえ」

と、使いがピストルでその女を撃とうとしたところが、その女性の権威にうたれて、ピス
トルで撃てなくなった。

キリストにある人は、みんなそうなんです。人数ではない。あなた方一人一人が、「二日千年」
というけれども、

「二人千人」

なんです。「千万人といえども我往かん」というのは、そういう凄さがある。こちらの何も
のにもよらない。

「ゼロ＝無限大」

の世界がそこにある。だから、心配するな。大丈夫だ。そのかわり――「大丈夫」という
のは、そういう意味で大丈夫なんだ――安閑としているんじゃない。やることが失敗したり、
回りがもうしようがなくなっちゃったって。

「そいつを全部、私は引き受けているんだ」

と、キリストは言われる。

「日本は、滅びるならば滅びろ」

と藤井先生が言っただけでも、それくらいの気持で、このしょうがない日本をしょって
かなければ。

もう、今の教育はなっていないよ、正直。先生方がダメだから。ただ

「民主主義だ」

とか言ってるね、そんなもの何になるかというんだ。本当の世界は「イズム」の世界ではない。



そういう点で、でつかかったのは、やつぱりゲーテだね。あのドイツはナポレオンに蹂躪されている時ですよ。その時に、ゲーテだの、シラーだの、ベートーヴェンだのがいたんです。ドイツの素晴らしい文化は、国が四分五列させられている時に、さんぜん燦然として光っていた。それは、各人が凄かつたから。

どうぞ、人の目にはどう見えようと——今日の題は

「愛の光」

だろ——皆さんは、キリストの愛の光そのものとなって進んでもらいたい。キャンドルサービスでも何でもありません。その点で、本当に今日は画期的なクリスマスだと思つていて。これはもう、見違えるような力が出てきますよ、皆さん、明日から。

医者も薬もありはしない——何もお医者さんをけなしているわけじゃない。いいですね。どんなに忙しくても、心の中には悠然ゆうぜんたるものがなくてはダメ。セカセカしていたらダメ。瓢ひょう々としてるんだ。

キリストの福音は我々の間に、今、本当の火を放とうとしている。十二召団はどんな姿だか知らんよ、私は。気合がかからなければ、春に、

「もうサヨナラ」

と言うかも知れないよ。

「小池先生は気が狂つた」

と、気が狂つたかも知れない。

「最後は一人でやる!」

と、それだけの気合をもって行つてください。キリストと一つになっていて、何がそれに勝てるか。いいですね。女の方でも同じことですよ。

●御霊の愛

芝はるといふ女工が福音印刷会社にいた。彼女は伝道者賀川の度々の話にいたく心をうたれ、その感動する目と御霊の愛に溢れた目とが火花を散らす。この伝道者は決してもつたいぶらない。

「私はね、新川に住むお食の親分ですよ」

彼は度々の病でまだ青白い顔だ。破れた粗衣に破れた袴、二人は身の上話をしあつた。女工は実は印刷会社の社長の娘。賀川の過去は小説より奇なる劇そのもの。彼女の胸には敬愛の火が燃えてきた。

一二年のクリスマスが来た。

「一二年」(1912年)というのは、私は「一九」をみな抜かして、私の詩にはそう書くんです。明治だ、昭和だ、平成だ、なんて言わない。キリストの年号でいくんですから。

賀川は教会で乞食招待会を開いた。もちろん、超満員。はるも手伝いに来た。愛に溢



れたその働きが賀川の中から熱い滴をさそった。

「武内君、あのおみつさんはどうしたね」

半身不随の乞食のことである。武内の代わりに別な人がこう答えた。

「先生、おみつは鶏小屋で寝とったよ」

ただならぬ返答なので、賀川はその小屋へ行った。みじめな姿の彼女に声をかけ、おぶつてやった。たれながしのため、悪臭を放っていた。彼は自分の家に連れてきた。そのことを聞いたハルは、さっそく教会から赤飯、吸物、蒲鉾、煮豆というクリスマスのご馳走を持ってきた。イエス団の人たちも、何かと、手伝いに来た。悪臭のため、彼らは顔をしかめた。はるは便の世話、着物の洗濯のみならず、自分の寝衣を替衣にしてやった。愛の力よ。その夜から、おみつさんは病勢が逆転し、次第に顔色もよくなり、口もゆるんできた。はるを見て、感謝の微笑を浮かべた。賀川とはるの神的な愛が病者を治した。神はこの事により、二人の心を近づけた。はるは賀川のもとで働くことを申し入れた。

「来るなら結婚のつもりで来てください」

誠に、美わしい天的約束だ。

そして、この二人は結婚することになる。賀川さんの奥さんというのはそういう人だった。賀川さんは教会でマヤス博士に司会してもらって、青木澄十郎という牧師さんに式をやってもらった。

新婚旅行はどこに行ったか。

二人は人力車にそれぞれ乗った。

「ごめん」

と車夫が。

「新川の貧民窟へ」

車夫は耳を疑い、また聞いた。賀川は大声で繰り返した。

どん底社会での愛の奉仕はいつまで続けても、根本的な救とはならぬ。この事に気が付いた賀川は新しい啓示を受けた。彼は、貧民窟を如何にしてなくするか、その研究のためにアメリカ留学を決意する。

といて、アメリカへ行って勉強する。とにかく、そういう人でね。社会のどん底も知るし、学問の上でも素晴らしいんだ。アメリカに行って、受験するんです。そして、その答案に試験官がびっくりした。試験官も知らないような事がたくさん書かれている。それで、すぐ入学。こういう生活をしながら、そういう勉強をしているんだからね。これはもう、聖霊の力でなければ、こんな事はできない。御霊の愛でないよね。

だから、質的に無限無量なものがあるんです、この御霊の世界は。決して、やれ何が少ないの、やれどこのこうのと、そんな事はかこつことはない。キリストの中にグツと眠れば、



まず4時間ぐらいでもう、それで目が覚めて、結構でございまして。人間の肉体には限度もありますから、私は無茶を言っているわけではありませんけれども、それぐらいの気合でね。

だから、もう、私は寝るも覚めるも自由自在でね、書斎でもって勝手なことをやっている。

●聖霊の火

祈らなくなつて、もう、話を聞くことが祈りです。あなた方、話すことも聞くことも、これ全部、祈りの世界なんです。特別に祈禱会なんてやらなくなつて。

それは、祈りますよ。祈りますけれども、二、三か所、引用しながらね。私はどこを引用するか分かるかい。ルカ伝12章49、50節。極めて重要なところ。

「⁴⁹我は火を地に投ぜんとて来れり。此の火すでに燃えたらんには、我また何をか望まん。

聖霊の火のことです。

「火を地に投ずるためにやって来たんだが、この火が燃えたら、もう私は望むことはないんだ」

と、キリストがいかに聖霊の火を投ずることを望んだか。ところが、その後には何と書いてあるか、

「⁵⁰されど我には受くべきバプテスマあり。その成し遂げらるるまでは思せまい遍いること如何許いかばかりぞや。」(ルカ12・49～50)

この句は、私はもう涙が出る。「受くべきバプテスマ」とは十字架です。

「十字架にのつかつて、自分は釘付けにされ、槍で突かれて、血が流れて、その贖罪の死を遂げてから、お前たちに約束の聖霊をくださすことになるんだ。待っている」

と。こんな人がいますか。

「この十字架を土台にして、それから、聖霊を下す。地上では、お前たちに、やるわけにはいかない。しかし、その火が燃えたら、もう何も要らないんだ」

と。それで、ペンテコステでひっくり返った。しかも、ペンテコステでひっくり返りながら、本当に受けとった者は、やっぱり少数者です。

著作集第十巻の12月22日の「一日千年」のところ。ペテロ後書3章8節、

「⁸愛する者よ、汝らこの一事を等閑みなわざりにするな、主のみ許では一日は千年の如く、千年は一日の如くである。⁹主その約束を果すに遅きは、ある人々の遅しと思ふが如きではなく、ただ何びとの亡ぶるをも望み給わず、凡ての人の回帰し来らんことを望みて、汝らを永く忍び給うのである。」(ペテロ後3・8～9)



●生命の光

それで、ヨハネ伝8章12節を見てください。

「¹²斯てイエスマた人々に語りて言い給う『われは世の光なり、我に従う者は暗き中を歩まず、生命の光を得べし』」(ヨハネ8・12)

手島さんが『生命の光』と書いたのはこれによるのでしょうか、おそらく。

「自分は世の光である」

と。ヨハネ伝で「世」というのは、「罪の世」のことなんです。

「その罪の世を愛する」(ヨハネ3・16)

と。

「永遠の生命を与えるためだ」

と。天来のキリストの愛は相手の区別をしない。どんな人をも本当に愛する。それは、助ける、救うということ。「かわいがる」という意味ではない。

「何とかして、神の喜びの中にいれてやる」

ということが、この「愛する」という心の内容だ。だから、一人のひとが

「いやあ、この福音は」

と言って歓ぶのを見るほどうれいことにはないです、正直、私は今までずっとやってきたけど。

「自分は世の光である。この罪の世の、惨憺たる人間の世の、神に背ける世の、その光だ」

と。暗夜の燈台みたいなものだ。だから、私は燈台が好きなんだよ。あなた方一人一人が活ける燈台だ。動く燈台。その光の質は愛です。昔から、宗教的に深くなった人の後ろに、「後光」を描くけれども、あれは本当だ。キリストなんか、まぶしくて見えやしない。

「¹³パリサイ人ら言う『なんじは己につきて証す、なんじの証は真ならず』」

¹⁴イエス答えて言い給う『われ自ら己につきて証すとも我が証は真なり。我は何処より来り何処に往くを知る故なり。汝らはわが何処より来り、何処に往くを知らず。¹⁵なんじらは肉によりて審く、我は誰をも審かず。¹⁶されど我もし審かば、我が審判は真なり、我は一人ならず、我と我を遣し給いし者と偕なるに因る。』」(ヨハネ8・13～16)

「神さまと一緒にやっているんだ」と。

もう一つ引用します。ヨハネ黙示録21章、

「²¹十二の門は十二の真珠なり、おのおのの門は一つの真珠より成り、都の大路は透徹る玻璃のごとき純金なり。²²われ都の内にて宮を見ざりき、主なる全能の神および羔羊はその宮なり。²³都は日月の照すを要せず、神の栄光これを照し、羔羊はその燈火なり。」(黙示録21・21～23)



神さまと羔キリストが宮であつて、別に神殿がなかった。

「羔羊はその燈火である」

と。まあ、凄いな、この啓示は。

「月も星も太陽も要らん、神さま、キリストが光だ」

と。凄いことが書いてあるね、聖書は。普通の頭では、

「こんな事はあるか？」

というでしょう。「こんな事はあるか」じゃないよ。そういう凄い世界。そういう光です。

あなた方、こういう聖書の句を読んだ時に、本当にその現実の中に自分を投げ入れるようにして読みなさいよ、光の中に。私はバカなのかね、そういうようにして読むんだがね。バカに徹した方がいいよ。

「光あれと言ひ給いければ、光ありき」

と、神さま自身が光なんだから。

「光あれ」

なんておっしゃらなくたって、もう光は来てしまふんだ。我々の肉体的存在は、太陽の光がなくなったら、どうなるんですか。自然的人間は、太陽の光がなくなったら、おしまいでしょ。魂の世界で、神・キリストの光がなくなったら、おしまいなんだ、本当は。おしまいを、みんな平気でいるわけだ、この20世紀の文明は。だから、ダメになつてしまふ。

「社会主義だ、何々主義だ」

と。「主義」なんていうものではない。

●天弓

とにかく、各人一人一人は、神さまに顧みられているんだ、どんな少年でも少女でも。

「お前を本ものにしてやりたいよ。お前はこういうことを本当に一生涯かけてやり

なさい」

と。ところが、日本の教育機構がそれをさせない。余計なことでもって、みんな壊してしまふ。先生がダメだ。だから、「受験、受験」と、受験勉強。マイナスの何乗だか知れない。そういう、神・キリストという光そのもの、愛の光そのもの、これに全身が浸透されて、――そうすると、あなた方、何になるかと思うかい――虹になるんだよ。だから、私は「天弓」という言葉が好きなんだ。皆さん一人一人の雫がキリストの光でもって、青く光ったり、赤く光ったり、その人によって色々だ。そうすると、これが無限色なんです。七色どころの騒ぎじゃない。だから、虹というものは、神さまの栄光を表している人間の素晴らしい姿になるんです。

「ああ、人間界はこの虹の如くなつたか。それが本当の天国だ」

と。それを示しているのがこの虹なんだ。創世記にも、虹のことが約束の徴になっている



でしょ。虹というのは

「虹霓」
ことうげい

という。「虹」は下の大きな虹。「霓」は上の少し細い虹。「虹」は雄の竜、「霓」は雌の竜。竜にも例えているんですよ、漢民族は。「虹霓」というのは、雄の竜と雌の竜が天で光るといふ。諸橋先生の漢和大字典を見てみなさい。

ワーズワースの「レインボウ」というのはいい詩だね。私は虹の詩を自分でも二つばかり書いた。

それで、黙示録の最後のところ、21章の23節で、

「神・キリストは光だ」

と。それが、何も最後の時ではない。今でも、キリストが太陽で、その光が、霊光が私達を貫いているんだと。

瞑想してくださいよ。グーツと力が来るから。瞑想しただけで、祈りの世界に入ってしまう。瞑想と祈りが一つになってしまう。二段構えでもつたいぶることはダメですよ。皆さん、私みたいに、簡単になつてください——おきな幼児の如くならなければ——簡単に受けとってしまう。幼児はお母さんに絶対依存しているんだ。

「キリストがいなければどうにもならない」

キリストがいなければどうにもならないで、全く生きていたのはパウロです。だから、

「ヨハネ伝が聖霊の心臓ならば、パウロの書翰は全部これは血肉である」

と書いたでしょ。私は、考えて、ああいうものを書いてるんじゃないよ。グーツと来て、感ずるから書いている。

朝から晩まで、非常に、神・キリストの御言、御光に貫かれて、有り難うございます。では、これから祈ります。

